

王善軍『宋代世家個案研究』

名古屋大学東洋史研究報告 四十五号 二〇二一年三月発行

小林 義 廣

一

一九八〇年代に入ると、大陸中国において、中国独特の親族制度としての宗族に対する関心が高まった。それから四〇年近くの歳月が流れて、以前ほどの熱気は感ぜられなくなっただけども、今世紀に入ってもその関心は続き、研究成果の公刊も引き続きなされている。日本でも、同じく一九八〇年代に宗族研究が暫く盛り上がりを見せたが、現在では、それを担った研究者も高齢化してしまった。しかも、若手の研究者は、それほど宗族に興味を抱かなくなつて、宗族研究が些か停滞していることと比較すると、評者のように、若干なりとも、その研究に関わろうとしてきた人間からすると、彼我

の隔たりの大きさに、正に今昔の感がする。

日本において、宗族に対する関心が一九八〇年代以降に一時は高まった要因の一つに、それまでの日本の中国史研究が生産関係論を中心とした社会構成体の構造を解明することに重点を置いて、それ以外の歴史的要素を等閑視する傾向に異論が差し挟まれ、それに対して反省の気持ち¹⁾を有するようになったことがあると思われる。しかし、同じ頃から、宋代に限って見ても、生産関係論を中心とした社会経済史研究以外の多方面の研究が出現し、それが次第に顕著になりだして、生産関係論のアンチテーゼとしての宗族研究の意味合いを薄めてしまい、一部の研究を別にすれば、宗族を中国史研究の後景に追いやってしまった。それは同時に、かつて社会経済史研究が担っていた日本の現実課題と対決するという意識も

稀薄化するという副作用を伴い、研究が現実や実生活と離れたものになっていったのではなからうか。^②

一方、中国においては、一九八〇年代に入って、いわゆる「四つの近代化」路線が国家政策として掲げられ、中国独自の宗族が「近代化」にとつて、どのような意味を持つかという切実な現実的課題に直面していた。^③ その課題意識は、今や世界第二位の経済大国になつても、研究者の心根のどこかに息づいて、研究を促進させているように、評者自身は感じてゐる。中国にとつて、宗族は自分の問題なのであり、そこに日本の場合と異なる意気込みの相違を看取できよう。

本書の著者の王善軍氏は、今回の著書を含めて、単著が四冊に上つている。まず、修士論文を修訂して出版した『宋代宗族和宗族制度研究』（河北教育出版社、二〇〇〇年）を皮切りに、博士論文が基になつた『世家大族与遼代社会』（人民出版社、二〇〇八年）を公刊した。更には宋代の家族・宗族制度を中核としながら、遼代史に関わる専論や宋代社会史の研究史など、多彩な主題の論文を満載した『陽都集』（中国社会科学出版社、二〇一二年）を世に問うてきた。その旺盛な研究意欲と度重なる研究の公刊からすると、今や中国を代表する宋代宗族研究者の一人と言つてよいだろう。^④

著者の研究履歴は、『陽都集』の序文や、同書所載の、大学院時代の恩師の漆侠氏の思い出を綴つた「有幸遇良師——追年漆侠先生」から大体は判明する。王善軍氏は、一九六六年の生まれ。郷里は、山東半島の付け根の南側に位置する山東省沂南^き県の、その沂蒙山区の浜河村荘であり、そこに山東大学に進学するまで暮らしていた。三番目の単著『陽都集』という題名は、秦漢から魏晉時代は当地が陽都県に所属したことに由来し、自分を育んでくれた郷里を忘れない意味で命名したという（『陽都集』の「序」）。山東大学卒業後、宋代史研究の泰斗の漆侠氏が教授を勤めている河北大学の大学院に進学し、修士課程を修了して博士課程に進学すると同時に、河北大学の出版事業の手伝いも行つている。河北大学出版社は、長年、漆侠氏を中心として『宋史研究論叢』という宋代史の研究論文集を出版し続けており、日本の宋代史研究者にも馴染みの出版社である。王善軍氏は、そうした環境の下で、漆侠氏の濃厚な薫陶を受けて、『宋代宗族和宗族制度研究』や『世家大族与遼代社会』という著作を完成させていた。職歴としては、四川大学で「博士後」として研鑽を積んだ後、大連大学の特聘教授（任期つき教授）を経て、現在は、陝西省西安市の西北大学歴史学院の教授に在職してい

る。なお、『陽都集』出版時点までの単著・共著、論文は、当該書の附録「作者主要論著目録」として載っている。

一一

本書は、題名にあるように、宋代の世家に関わる論文から構成されている。世家とは、代々、高官を輩出した名門一族のことで、日本の多くの研究者は「名族」と称してきた。以下、本書のいう世家は名族と記す。

緒論

- 第一章 首創義莊——蘇州范氏家族
- 第二章 共財与家法——饒陽李氏家族
- 第三章 没奈何の財富——成紀張氏家族
- 第四章 六世詞科只一家——華陽王氏家族
- 第五章 尽有諸元——浦城章氏家族
- 第六章 三槐的期待——大名王氏家族
- 第七章 門族之盛、為天下冠——真定韓氏家族
- 第八章 武功顯赫的外戚——真定曹氏家族
- 第九章 富足而為惡——青州麻氏家族

第十章 特権庇護——邢州柴氏家族

参考文献

後記

最初に、各章で使用される「家族」という語句に注意を喚起しておきたい。それは、本書の内容とは直接には関わらず、しかも中国の家族制度の専門家には余計な説明であるけれども、家族制度に関心を有しない研究者には、必ずしも周知の事柄ではないからである。中国語の「家族」は父系で辿れる血族を指す言葉であって、したがって日本語の「家族」よりも広い範囲を示し、父系血縁に繋がれば、どれほど遠い血族であっても、「家族」と呼ぶ。それは文章用語では、多く宗族と称される。本書の使用する「家族」の語句も、宗族と言い換えて良い場合が多い。拙評では、著者が「家族」と記している、日本語の家族と混同しないように、出来るだけ「宗族」という語句を使用しよう。それでは、日本語の家族に近い言葉は何かというと、「家庭」という語句が使用される。日本語の家庭は、近代に入って、家族が生活する場を示す英語の home の訳語として定着していった。その意味でも、中国語の「家庭」という語句は、日本語とはズレがある。⁽⁵⁾

緒論は、最初に、本書が「世家」という語句を用いる理由を記している。著者は、宗族（「家族」）勢力と政治勢力が相互に結合した状況を示す言葉としては、望族、巨族、大家、大姓、勢家、閥閥などというように、多種多様な語句が見られるが、宋代の文献中に最も頻出する「世家」（拙評は「名族」と呼ぶ）という語句を使用すれば、多義的な解釈とならないだろうと説明する（一頁）。その次に、本書の基本的視角を記すが、それは本書全体と関わるので、次節に取り上げよう。この、本書の視角を述べた後に、宋代中国の家族・宗族を個別に扱った主要な研究を大陸中国や台湾を中心として紹介し、その他に、英文や日本語の著作も取り上げている。その一環で拙著『歐陽脩 その生涯と宗族』（創文社、二〇〇〇年）にも触れている。こうした紹介の後に、本書の各論文は一九九〇年代に入ってから執筆した一〇篇の個別論文から構成されている点に言及して、最後に各論文の重点が極く簡単に記される。この最後の、キャッチフレーズの語句は、簡潔すぎる難点があつて要領を得ないものの、的確に著者の各論の性格を言い表す場合もあり、適宜、第一章以下の各論文紹介に利用しよう。また、各章で取り上げる一族の特色は、各章の巻頭に掲げる各族に関する史料からの引用に

よつても示そうとしている。

第一章は、皇祐元年（一〇四九）、范仲淹が蘇州郊外に創設した范氏義莊を取り上げる。范仲淹は、我が国の水戸徳川家の庭園、後樂園の語源となった「先憂後樂」を政治信条とした人物であり、范氏義莊は義莊の嚆矢として歴史に名を留めている。著者は、その范氏義莊を義莊それ自体の発展というよりは、范氏一族の発展と絡めた叙述を展開するために、范仲淹以後の義莊の発展・維持に関わった族人に紙幅を多く割いている。著者によると、范氏一族の中で、族長の地位に就いたのは、基本的には范仲淹の直系子孫だということ。そして、最後に、義莊の役割として、それは慈善が主な目的ではなく、一族が長期に互り富貴を保つ安定的基礎を提供したとし、世家の社会的地位を維持してゆく上で重要な意義を有していたと結論づけている。

第二章は、饒陽（河北省饒陽県）の李氏一族を、一族共財と家法という点に着目して論述している。饒陽の李氏一族からは、太宗朝に宰相となった李昉を生み出し、その李昉は、古代・中世の小説集ともいふべき『太平広記』の編集責任者として知られている。本章は、唐末・五代以来、饒陽とその近隣に李昉の努力もあつて設置した田地と、その管理の状況、

一族の盛衰が主に語られる。その上に立つて、一族の家法・家風が一族の共財と深く結びつき、その一方で一族の財産の助けを借りて家法や家風の建設がなされたと主張している。

第三章は、本書で一番に分量の多い章であり（四九頁）、成紀（甘肅省成紀県）の張氏一族を分析の対象としている。成紀の張氏は、南宋初、武将として活躍した張俊が一族を發展させた張本人であり、「緒論」で著者が「成紀の張氏家族は経済勢力」の典型と紹介しているように、張俊が王朝からの賞賜や収賄、権勢を背景として浙西に食欲に土地集積をしたことで有名である。張氏は、その他、高利貸しや房屋の賃貸でも富を集積し、贅沢な消費生活を謳歌したが、均分相続や政治闘争に敗れたこともあって、南宋滅亡直前には急速に衰退していったという。張俊の悪辣ぶりは、日本でも周藤吉之氏が『宋代官僚制と大土地所有』（社会構成史体系二、日本評論社、一九五〇年）を初めとした著作で指摘している。宋代に興味をもつ一人としては、武人の張俊と同じ時期に、文官の張浚は主戦派の硬骨漢として論陣を張り、子供に南宋道学の中心人物の張栻（張南軒）を輩出したのと好対照である点である。二人は、正に歴史の面白みを感じさせてくれる対象であろう。

第四章は、「六世詞家只一家」と呼ばれ、代々に互って科挙合格者を輩出した華陽（四川省成都市）の王氏一族を扱っている。華陽の王氏一族は、王永が繁栄の基礎を築いた。彼は五代の後蜀に仕え、後蜀滅亡後は宋朝にも出仕した。この一族は蔵書を重視して、それを財産と見なし、家庭教育も充実して、科挙合格者を輩出したという。しかも、多くの科挙合格者を出す、たとえば開封の鄭氏一族などの名族とも姻戚関係を結んだり、有力な科挙合格者を婿とする「榜下捉婿」（文字どおりは、合格発表時に婿を見つけるという意味）という一族繁栄策を採用した。「榜下捉婿」として、王氏一族の婿になった著名人としては、南宋高宗朝の権臣の秦檜がいる。王氏一族の中で、最も傑出したのは、熙寧九年（一〇七六）に宰相となった王珪であり、彼は長期間にわたって高官であったので、北宋晩期には社会に対する影響力を増大させ、南宋初めまでに多くの仕官者を出した。秦檜が亡くなり、南宋二代目の孝宗朝になると、王氏の勢力は衰退したけれども、南宋中期以後も、些かの族人は仕官を果たした。いずれにせよ、王氏一族の事例は、一族の繁栄にとって、権勢との関わりが重要であったことを例証していると結論づける。

第五章は、福建建州浦城県の章氏一族を取り上げている。同族からは、仁宗朝の宰相の章得象や、哲宗朝の丞相の章惇を生み出した。一方、経学に造詣深い人物も多く、『名賢氏族言行類稿』の章定や、『山堂考索』の章如愚といった学者型の人材も輩出している。本章は、個別の人物を取り上げるのではなく、一族と科挙との関わりを中心とした探求であり、一族の発展に科挙が如何に関わっていたかに重点を置いた叙述となっている。同族は、唐末に康州（広東省徳慶県）刺史となった章及を始祖とし、その子供の章仔鈞が五代の閩に仕えて著姓となり、兩宋を通じて朝廷や地方に官職を持ち続けた。それは、科挙だけでなく、出世した人物の恩蔭によるものも多かったためであるが、科挙合格のために、とくに家庭教育を充実させ、族塾を創設し、一族の優秀な子弟には特別の育成教育を施したりした。また、義莊を創設したり、祭祖・修譜・族会などの活動があつて一族の連繋が図られたという。なお、浦城の章氏一族に関しては、一九八二年に、ロバート・ハートウエル氏 (Robert Hartwell) の、十二世紀を境として、エリート層は中央から地方に関心を移していったという指摘を含む著名な論文が出され、その典型事例として、この浦城章氏一族を取り上げている⁶⁾。そして、

章氏一族は、北宋には章得象・章惇といった高官を生み出しながら、南宋に入ると、官僚もそれほど輩出しなくなり、婚姻も郷里近くの姓氏と結ばれたという指摘をしている。残念ながら、本章は、宋代史研究者に馴染み深いこの論文には全く触れていない。

第六章は、真宗朝に王旦という宰相を輩出した三槐の王氏一族を取り上げている。三槐とは、一族の祖地の大名府莘県（山東省莘県）に由来するのではなく、王旦（真宗朝の宰相）の父の王祐（五代後晋から宋初にかけて、各朝に出仕）が開封の自宅の庭に三本の槐を植え、「子孫の中から必ず三公となるものが出現するだろう」と予言したことに因んでいる。王旦は王祐の次男で、彼の出世によって、一族に恩蔭出仕者を多く輩出し、社会的声望も獲得できたが、北宋末期の党争に巻き込まれて一旦は没落した。南宋に入つて、金との交渉に活躍し、最後には金に抑留されて死亡した王倫が、一族の再建者であり、彼のお陰で子孫は官職を得られた。その一方、王旦の三男の王素（仁宗朝に活躍）の子孫が衢州（浙江省衢州市）に住み着き、別派として繁栄した。一族は、その生き残り策としての、婚姻戦略として、王旦の「婚姻は閩閩を求めず」を採用した点が歴史上に有名であり、子持ちで貧

乏書生の韓億（仁宗朝の参知政事）が科擧合格後、王旦の娘と結ばれたのも、その方針によると言われるけれども、王旦やその息子たちの事例に見られるように、決して家柄を軽視したわけではないという。王氏一族は、家世維持のために、婚姻関係以外にも文化的業績を挙げることや、子弟教育、書籍と翰墨の所蔵を重視し、それが一族の仕官と影響力拡大に大きな役割を果たしたという。なお、三槐王氏一族に関しては、著者も註に引用する、李貴録『北宋三槐王氏家族研究』（齐鲁書社、二〇〇四年）が纏まった著書として存在する。

第七章は、前章でも触れた韓億の一族であり、同族に関しては、脚註にも記されている拙文でも論じたことがある⁸⁾。一族は韓億が真宗朝に科擧に及第して隆盛に向かい、更には三人の子供が科擧に合格し、その中で、三男の韓絳は神宗朝の宰相、六男の韓縝は哲宗朝の丞相となって、宋代に著名な名族の一つになっていった典型的事例である。一族は婚姻、それに好學と、「孝友雍睦」などの家風によって名族としての地位を維持していった。経済的には、族人を救済する義莊を五男の韓維が創設し、一族の浮沈を緩和したという。面白い指摘としては、韓氏一族は比較的長命で、それが政治的チャンスに恵まれる機会を提供したという点である（二〇一頁）。

しかし、一族は南宋交替期の戦乱で正常な発展が阻害されて昔日の俤を失い、第六世代の韓元吉が吏部尚書に出世したのが目立つ位であり、その子供の韓澆は恩蔭出仕したが、早くに致仕して、詩文の作成に努めたと述べる。南宋中期以降の一族の動向は記していない。

第八章は、真定府靈寿县（河北省靈寿县）出身の、曹氏一族を扱っている。一族は五代以来の武將の家であり、宋初に後蜀・南唐・北漢の平定に活躍した曹彬が一族を「高門大族」にした。曹彬の四男の曹瑋が対タンゲート戦に活躍するなど、子孫は武職に就く人物が少なくなかったけれども、一族から仁宗の皇后を輩出してから外戚としての地歩を固めた。仁宗の曹皇后は、英宗の皇太后、神宗の太皇太后となって、一族と帝室の婚姻が頻繁となった。南宋に入って帝室との婚姻は無くなったが、大官僚との通婚は続き、一族の社会的地位の維持に役立ったという。このように、曹氏一族の発展は曹彬らの功績による恩蔭と外戚身分によっていると指摘する。ただ、宋朝建国の功臣の曹彬は、単なる武人ではなく、遠征中の橐中に書物を入れていたように、それなりの学識もあり、それが子孫にも伝統として伝わり、南宋になると、その文化的素養を基に、武人ではなく科擧の競争に加

わっていったとも述べている。

第九章は、青州臨淄県（山東省淄博市）の麻氏一族を取り上げている。麻氏一族については、本章の脚注に注記されているように、愛宕元氏わたがきはじめに日本語の論文があるが、愛宕氏は新興地主層としての側面に焦点をあてるのに対して、著者は、郷里社会に跋扈して地方官を悩ませながら、急速に没落していった悪辣な一族の側面に重点を置いて記述している。麻氏は、五代時代、麻希夢が青州の下級地方官であったときに富裕になった。それは、後周の太祖（郭威）に殺害された当地の節度使の劉錐が、民衆から誅求して集めて隠していた財産を自分のものにしたからである。宋代に入って、一族は科挙合格者を出したり、中央から地方に至る官吏と結び付いて、政治勢力を拡大していった。一族の発展に役立たない下級官吏には目もくれなかったという。しかし、真宗の天禧四年（一〇二〇）、一族を統率していた麻士瑤が族人を殺害して、その事件が明るみに出たことを契機に、重い刑罰が一族に科され、財産が没収されて急速に衰退した。それでも、残された財産も相当に上り、この事件を境として豪横の家風は変化し、中級の地主として生き抜いたという。

第十章は、後周の世宗の子孫、邢州（河北省邢台市）の柴

氏一族を考察の対象としている。柴氏一族は、世宗の直系が絶えても、世宗の父親柴守礼の子孫が優遇され、両宋時代を通じて爵位と官位は世襲された。しかし、そのことによって、一族は社会上の競争力を失い、教育を重視しない点もあって、科挙合格者を輩出しなかった。それは、呉越の後裔の錢氏一族とは好対照であり、社会的影響力をもたない世家であったという。こうした点を述べた後、他の章と異なっていて、文学に登場する柴氏一族という側面に着目した叙述をしている。すなわち、柴氏、とりわけ『水滸伝』に載る小旋風柴進を取り上げて、描写には一部は誇張もあるけれども、事実と符合する要素もあると指摘する。そうした叙述をしながら、「結語」では、宋代の専制主義政治体制の下で、一般の官戸よりも多くの特権を享受した一族が存在していたが、柴氏は、その特権を利用して政治的・社会的影響力を進めることができず、既存の特権に依拠して、代々の官職を糸のよう

に細々と続けたに過ぎなかったと結ぶ。

「後記」は、本書に結実することになった研究動機を記している。それによると、宋代の世家に関する個別研究が、宗族研究の中では遅れているという意識に立って、一九九七年に真定の韓氏一族に関する論文（本書第七章、原載は『新史

『学』八卷第四期)を發表したというのである。そして、二〇年を経過し、ここに一応の完成を見たとき。再録するに当たっては、史料を補充し、雑誌発表時には無かった各一族の系図を付け、研究成果の増補と参考文献を付け加えたと述べている。

二二

それでは、著者は本書を通して、宗族の如何なる側面に着目して、独自の論理を展開しようとしているのであるか。この点を検証するためには、前節では省略した、本書の視角に言及した「緒論」の当該箇所に戻ろう。著者は、本書の視角を、次のように語っている。宋代は、「中国古代社会」の変革期(著者は「転型時期」と記す)であり、宋代の名族(「世家」)も、その社会的条件下の産物であつて、当然ながら、名族の様相も、この時代全体の特徴と組み合わせ論じなければならぬ。しかしながら、従前の研究は、名族の個別研究は多いが、宗族(「家族」)研究に閉じこもりがちであつて、それを集団として認識するという点、更には時代状況と有機的な繋がりをもつて認識する方法は採られていな

かつたものである(一・二頁)。要するに、著者は、名族を、唐代までとは異なつた独特の歴史的意義を有する、変革期の宋代社会という文脈の中で理解しようという志向性を強く抱いているのである。そのような視角に立てば、前節で極く簡単に紹介した各章の内容からも、各名族を、それぞれの時代環境(宋初・北宋中期・北宋末・南宋初、あるいは両宋を通じてなど)に応じて、各名族が、如何に創建され、そして時代環境に応じて、それがどのように変化していったのかに十分に注意を払つた叙述の仕方をしてると了解できる。しかも、著者は、それを微細な記述を含む豊富な史料を丹念に探查して、それに基づく論証を行つて、本書を重厚な宋代の名族宗族(「世家族」)研究にしているといえよう。史料の深い読み込みには教えられる点多かつた。加えて、宋代を代表する士大夫の王旦や范仲淹から、悪辣な武人の張俊や、五代王朝の後裔の柴氏一族まで、幅広いテーマを扱っている。本書を、宋代宗族研究の大きな成果の一つとすることに異論はない。

それでも、正直に言つて、読了後に何か物足りなさを感じるのは、評者の独りよがりの片寄つた想念であらうか。それは、たとえば、前著『陽都集』所収の手際の良一文(「関

于義門大家庭分布和發展的幾箇問題」と比較すれば、矢張り何かしら不充分さを感じてしまふのである。著者は、当該論文において、黎小龍氏が各正史の「孝義」伝・「孝友」伝から義門が唐宋時代に高潮期を迎えたという結論を導き出したのに対して（「義門大家庭の分布与宗族文化的区域特徴」『歴史研究』一九九八年第二期）、それは飽くまでも、正史や、「孝義」伝・「孝友」伝の特性を考えない論定であり（正史の「孝義」「義門」は王朝国家の旌表の中から選択して載せており、全部ではない）、更には正史以外の他の史料を引き合いに出して、そう断定できないことを鮮やかに論証して見せていた。

少し本書に従って検討してみよう。第一章は、義莊の嚆矢として著名な范氏義莊を取り上げている。本章の初めに、著者は、従前の研究を振り返って、その多くが范氏義莊それ自体に関するものであって、范氏一族の発展と結びつけた分析は、それほど多くはなく、義莊と范氏一族とを結びつけた本章の論述の意義を強調する。著者のこの視角が目新しいのかどうかは、本章の范氏義莊研究を紹介する脚注に引かれる遠藤隆俊氏の研究が、そうした方向性の下でなされており、その点では多少の疑問は残るけれども、確かに本章は、一族の

動向を中軸に据えて、宋代の范氏義莊の展開を分析している。当然、義莊の発展それ自体の分析は後景に退いているといえよう。しかしながら、やはり本章の脚注に引く、近藤秀樹「范氏義莊の変遷」（『東洋史研究』二一一二、一九六三年）は、范氏義莊を地主制の展開と関わらせて論じており、同じく、私自身の「宋代蘇州の地域社会と范氏義莊」（『名古屋大 学東洋史研究報告』三一、二〇〇七年）は、宋代の蘇州という地域社会を念頭に置いて、范氏義莊の意義を説いている。いずれの論考も、義莊の設置や発展の様相を分析の対象としながら、その分析を通して、本書で著者が採ろうとしてしている時代状況・社会環境との関係を探らうとしようという志向性を共有している。こうした方法や志向性では時代状況を捉えきれないとすれば、それは何なのだろうか。その疑問に対する答えが冀求される。

同じことは、第三章の成紀の張氏一族、つまり南宋初に活躍した武将・張俊の一族に関する記述からも窺えるように思える。南宋初という時期は、再建されたばかりの南宋政権が不安定なこともあって、政治的・社会的な動乱が続いた時期である。南宋政権の創立当初、北宋の滅亡に伴う軍事組織の崩壊によって、軍事的には、勢い各地の義勇軍に頼らざるを

得なかつた。やがて、それらの義勇軍は中央軍に編成されてゆくのであるが、その新たな軍事組織に再編成されるまでの間は、各義勇軍は、その将領の下に軍閥化する傾向にあった。岳飛の軍隊が岳家軍と呼ばれたのは、その端的な例証であろう。張俊の軍隊も、そうであつたし、その他に韓世忠、劉光世なども自己の軍隊を抱えて、実質的には各地に跋扈していた¹⁰。その中で、張俊は多種多様な機会を利用して土地を初めとした財産を蓄積していったが、他の軍閥も、多かれ少なかれ、程度の差はあつても、同様な動きをしていた。とすれば、張俊の独自性は、どうだったのか。著者の指摘する権臣の秦檜との結びつきが有利に働いたとしても、他の要素はなかつたのかなど、当時の時代状況を掘り下げながら、他の軍閥との比較があれば、もっと張俊の在り方に説得性を増したように思える。いずれにせよ、范氏義莊にせよ、張俊の一族の考察にせよ、著者の言う社会との関わりは、単に社会変化と義莊の発展とを機械的に繋げたという印象を拭いきれないのではなからうか。

もう一つだけ事例を挙げよう。第九章は、繰り返しになるが、青州臨淄県の麻氏一族の興亡を考察の対象としている。その財産の蓄積と、郷里社会に対する悪辣な豪横ぶりは、余

すところ無く描かれており、「富足而為惡者」の典型だという著者の断定も(二五一頁)、充分に説得力を有している。それでも、宋初という時代背景を考慮に入れて、麻氏一族は、どのような歴史的意義をもった一族なのかという問いを発したならば、そこに何かしらの不満を覚えるのではなからうか。著者が脚注に引用する愛宕元氏の麻氏一族研究が、唐末以降に台頭してくる新興地主層の具体的姿の事例として位置づけようとする姿勢との相違に、少なくとも日本の読者としては気づかされてしまうのである。

全体の視角とは別に、本書を読んでいて、最初に気づく点は、「後記」にも記されているように、丹念な史料の読み込みや系図の添付であろう。史料の読み込みは、着実な論証を導き出している。一例を挙げよう。第二章は、前節で紹介したように饒陽の李氏一族を考察の対象としており、一族を名族(「世家」)に引き上げた李昉に関して、太宗が「善人君子」と評したという紹介をしている。その上で、当該の脚注に(四六頁、脚注①)、『宋会要輯稿』「帝系」の記事を典拠に、呉処厚『青箱雜記』、劉斧『青瑣高議』、羅從彦『遵堯錄』などが、このことを太祖の建隆元年としている記述の誤りを指摘している。著者のような、丹念な史料の探索と読解

が説得力を増した叙述の例証といえよう。

このように、本書が、関係する史実を零細な史料にも目配りして叙述に生かす手際に感心させられるけれども、それだけに、時には散見される、上手の手から水が漏れる事例は、かえって目立ち、読者にある種の苛立ちを感じさせてしまうのではなからうか。幾つかの事例を挙げよう。第二章は、太宗朝の宰相、李昉の一族を分析の対象としているが、その第二節では、李氏一族の財産問題を扱っている。著者によると、一族は五代以来、大量の土地を保有し、それに付け加えて李昉が土地を購入し、累世同居をしていたこともあって、一族は共財を基礎とする助け合いを行っていたが、次第に各支系の間に格差が生まれ、南宋になると、共財の痕跡さえも見られなくなった。しかし、共財の観念は残っていて、仕官者が窮乏した族人に散財して生活を助けていたと論じている(二七・三八頁)。この、共財観念の存続は、興味深い指摘に思えるけれども、その共財観念を具体的に示す史料は示されておらず、論証に何かしら釈然としない印象を与える。第三章は、前節でも述べたように、本書で一番に長篇であり、南宋初の軍閥化した張俊の一族を扱っているが、「(四) 家産経営」の殖産の事例をみると、史料を示して実証していない

と思われる箇所がみつかると、とりわけ、その「3 高利貸経営」では、張俊が軍中において高利貸していたと指摘しているが、その箇所は民業としての経営を論じた部分であるので、そもそも、その高利貸しが純粹の民業なのかどうかという肝心な点に関する説明が必要であろう。しかも、家産経営は税役逃れのために行っていると述べながら、肝心の高利貸しの実体を示す直接的な史料を示していない。些か煩雑になるので、もう一例だけを挙げよう。第五章の浦城の章氏一族に関する叙述で、第四節は一族の子弟教育や文化的成果に言及している。著者によると、章得象が郷里に創始した昼錦堂という族塾を中心として、一族の子弟教育が行われ、とくに優秀な子弟は特別な育成教育を受けたと指摘している(二四一頁)。この指摘は、従前の宗族研究では、あまり論ぜられることない注目すべき点であると思われるが、優秀な子弟の実例は挙がっていない、まさに優秀な子弟だけは特別な扱いを受けていたという史料は引用されていない。

また、明らかな間違い、あるいは勇み足と思われる記述も存在する。第一章の、范氏義荘を論述している中で、范仲淹とその子孫を挙例して、南宋時代、仕官した人たちは、結局は退職後も郷里に帰らないのが普遍的状况であったと指摘し

ている(二四頁)。しかし、北宋時代は、確かに、そうした傾向にあるものの、南宋に入ると、むしろ任官と任官の間の、ポスト待ち期間、いわゆる待闕のときも含めて、官職にないときは郷里に居住する傾向を強めたというのが現時点の宋代史研究の一般認識ではなからうか。^①

系図は、各章の終わりに附載されていて、当該一族の血縁的關係を示していて、非常に有益である。しかし、著者は、各章において、一族の繁栄維持のために、有力一族との婚姻關係を重視していたという記述からすると、各一族の父系關係だけではなく、姻戚關係をも示す系図であった方が、無論、より望ましいと思われる。

王善軍氏は、篤実な宋代宗族の研究者であり、従前から氏の研究成果からは、多く教えられてきた。本書も、その一つである。それにも拘わらず、「吹毛求疵」ような紹介に終始したかも知れない。御海容を請う次第である。

人民出版社、二〇一九年五月、本文二七六頁、参考文献二七四―二九四頁

註

(1) 戦後日本の中国史研究が、どのような課題を掲げて論争を展開してきたかは、かなり古くはなつたが、谷川道雄 編『戦後日本の中国史論争』(河合文化教育研究所、一九九三年)の各篇が丁寧な議論を展開している。なお、私自身は、宋代という時代に限って、一九八〇年代に至るまでの問題点を指摘している(『宋代史研究における宗族と鄉村社会の視角』『名古屋大学東洋史研究報告』八、一九八二年)。

(2) 谷川道雄氏は、生前に繰り返し、現実課題意識の喪失に伴う研究の分散化・個別化が、研究者の生き方と分離した結果、中国史の全体像を提示しようとしないうる欠陥を持つようになったという警告を発していた(たとえば、『戦後日本から現代中国へ——中国史研究は世界の未来を語り得るか』河合文化教育研究所、二〇〇六年、六一―六五頁)。

(3) それは、一九二七年に毛沢東が自身の郷里の湖南省を实地調査して、近代化を阻む要素の一つとして宗族を挙げて以来(『湖南農民運動考察報告』『毛沢東選集』一、外文出版社、一九六八年、四八―四九頁)、大陸中国の研究者には一貫して意識されていて、その立場の代表として徐揚杰氏がおき、逆に必ずしも近代化に立ちほだかる要因とはならないという馮爾康氏を初めとする研究者との考え方の相違がある。それについては、馮爾康『中国古代的宗族和祠堂』(商務印書館、二〇一三年)の私の邦訳の「解説」を参照して欲しい(『中国の宗族と祖先祭祀』風響社、二〇一七年)。

(4) 『宋代宗族和宗族制度研究』と『陽都集』の内容に関しては、いずれも拙評があり、それを参照して欲しい。前者は『東方』

- (二二四号、二〇〇一年六月号)、後者は『東海史学』(四八、二〇一四年)に載っている。
- (5) 以上の説明は、遠藤隆俊「家族宗族史研究」(遠藤隆俊・平田茂樹・浅見洋二 編『日本宋史研究の現状と課題——1980年代以降を中心に——』汲古書院、二〇一〇年)にも簡潔に語られている(一〇六・一〇七頁)。
- (6) Robert Hartwell, "Demographic, Political, and Social Transformations of China, 750-1550," *The Harvard Journal of Asiatic Studies*, vol. 42, 1972.
- (7) 張邦焯「試論宋代の婚姻不問閥閥」(同氏著『宋代婚姻家族史論』人民出版社、二〇〇三年)。
- (8) 拙稿「宋代の二つの名族——真定韓氏と相韓韓氏——」(井上徹・遠藤隆俊 編『宋—明宗族の研究』汲古書院、二〇〇五年)。
- (9) 本書、二四五頁、脚注①。愛宕元「五代宋初の新興官僚——臨淄の麻氏を中心として——」(『史林』五七—四、一九七四年、後、同氏著『唐代地域社会史研究』同朋舎、一九九七年所収)。
- (10) 各地の義勇軍の動静に関しては、黄寬重「南宋時代抗金の義軍」(台湾・聯経出版 事業公司、一九八八年)、義勇軍が中央軍の再編成されてゆく過程に関しては、小岩井弘光『宋代兵制史の研究』(汲古書院、一九九八年)「第三篇第一章 南宋初期兵制について」を参照。

(11) 前掲、Robert Hartwell 論文、竺沙雅章「北宋士大夫の徙居と買田——主に東坡尺牘を資料として——」(『宋代官僚の寄居について』(同氏著『宋元仏教文化史研究』汲古書院、二〇〇〇年)。

(こ)ばやし よしひろ 東海大学文化社会学部アジア学科
非常勤講師)